

第2次助成先報告



社会福祉法人野田村保育会
野田村保育所再建事業



岩手県
水産業共同利用施設復旧支援事業



岩手県
製氷・貯氷施設回復支援事業



宮城県
農業生産復旧緊急対策事業



宮城県
農業生産復旧緊急対策事業



釜石市漁業協同組合連合会
魚市場経営基盤再生事業

第2次助成

	申請団体	事業名	事業概要	助成金額 (単位千円)
1	岩手県	水産業共同利用施設復旧支援事業	今期収穫可能な採介藻（アワビ等）や養殖ワカメの収穫作業に必要な漁船巻揚機及び荷役クレーンの整備費用を助成する。	91,797
2	岩手県	製氷・貯氷施設回復支援事業	県内で最も水揚量が多く、魚市場の再開の早い大船渡魚市場の製氷施設、貯氷施設の整備費用を助成する。	246,466
3	釜石市漁業協同組合連合会	魚市場経営基盤再生事業	魚市場の水揚げ機能確保対策としての氷供給施設（移動碎氷車）及び衛生管理施設（殺菌冷海水製造装置）の整備費用を助成する。	185,500
4	宮城県	農業生産復旧緊急対策事業	いち早く震災被害を克服して営農再開を目指す、意欲ある先導的な農業者組織の生産施設や農業機械の整備費用を助成する。	1,322,018
5	社会福祉法人野田村保育会	野田村保育所再建事業	流失した保育所を安全な高台に再建する費用を助成する。	319,000
6	相馬市	相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業	応急復旧した代替岸壁での海上コンテナ物流用の代替クレーン及び集積機材（リーチスタッカー）の整備費用を助成する。	103,000

岩手県 水産業共同利用施設復旧支援事業

津波で壊滅的被害を受けた魚市場・漁港の復旧を支援

岩手県の魚市場や漁港は、津波により養殖用の資機材、漁船の陸揚げ用機械、水産物の水揚げ用クレーンなど、大切な設備をことごとく奪われた。そこで岩手県は本助成を活用し『水産共同利用施設復旧支援事業』として第2・3・4次の3回にわたり、県内の13の魚市場にある水産共同利用施設の復旧を段階的かつ効果的に支援を続けている。

第2次の助成内容は、漁船巻揚げ機および荷役クレーンなどである（第3・4次の助成については後のページで報告）。

普代村漁業協同組合では、黒崎漁港、太田名部漁港、白井漁港、沢向漁港、堀内漁港で養殖されるワカメやコンブ、また定置網で獲れる秋サケを主に扱っていた。

「五つの漁港すべてが津波の被害を受けましたが、普代村の中心地は防潮堤と水門のお陰で無事でした。人的被害が少なかったため、他の漁港に比べていち早く動き出すことができたのです」と前川健吾代表理事組合長は振り返る。普代村では、かつて深刻な津波被害に遭った経験をもとに、1967年に防潮堤を、1983年には15.5mという高さの水門を建設。津波は港にあった作業場や漁船などを破壊しながら押し寄せてきたが、この防潮堤と水門が最後の砦となり、多くの村人の命を救った。

震災前には603隻あった漁船の大半を津波で失ってしまったが、漁師はすぐに青森や北海道に向かい、中古の漁船を購入。早急に約480隻まで戻すことができた。後は津波により破壊された漁船を陸揚げするのに使用する巻揚げ機や荷役クレーンの整備である。そこで、堀内漁港には巻揚げ機4台を、黒崎漁港と太田名部漁港には荷役クレーンを導入し、漁船が安心して水揚げできる体制を整えていった。

綾里漁業協同組合は、綾里漁港や周囲の浜でワカメ、ホタテ貝、ホヤの養殖業、またアワビやウニ、コンブの採介藻漁業を営む組合員たちで構成されている。港には作業場が立ち並んでいたが、巨大な津波がこの作業場もろとも養殖に必要な漁具、小型漁船の陸揚げに使用していた巻揚げ施設などを一度に奪い去ってしまった。

「それでも2011年11月にワカメの種まきを行うことができました。ガレキ撤去作業ではあまり覇気のなかった組合員の表情が、本来の仕事に取りかかるとぱっと明るくなって、2012年5月の水揚げの時のみんなの笑顔は忘れられません」と川上明参事は思い起こす。

しかし、漁船の巻揚げ施設が損壊したため、養殖や採介藻漁業に使用する小型漁船の陸揚げは人力で行わなければならない。これは危険も伴うため、本助成を活用して急ぎ整備を進め、4台を設置した。

「漁港の完全な復活には、まだ何年もかかると思います。それでも若い世代は“小石浜＝恋し浜”ブランドとしてホタテの駅弁などを売り出しはじめました。こうした組合員たちの情熱があれば、綾里の各漁港にかつての活気はきっと戻ってくると私は信じています」と川上参事は話している。

【以上、2012年10月31日版掲載情報】



普代村を救った巨大な防潮堤と水門



ワカメの養殖棚を指し示す普代村漁業協同組合の前川健吾組合長



船をつり上げるホイストクレーン（普代村黒崎漁港）



電気がなくても動かせるエンジン式（写真）を含む計4台の巻揚げ機を導入（普代村堀内漁港）



津波が漁協の2階を突き抜けたと話す綾里漁業協同組合の川上明参事



船を浜に引き揚げる、巻揚げ機を綾里漁港、港地区に4機設置

岩手県 水産業共同利用施設復旧支援事業

漁船を陸揚げする巻揚げ機を3漁港に8台導入

一つひとつは小さくても地域の生活の核となる大切な漁港を管内に四つ持つ田野畑村漁業協同組合では、津波で各港の重要な機能が破壊されてしまう。そこで平井賀漁港、羅賀地区、机漁港に計8台の小型漁船用の巻揚げ機を整備した(同支援事業の第4次助成では、荷捌き施設の助成も受けている)。

「2011年12月に仮設市場を開きましたが、被災後は、船も資材も建物もなかなか用意できず思うように仕事ができないもどかしさがありました。それがこの助成で一つずつ整備でき、各漁港の活気も戻りつつあります」と中村芳正代表理事組合長は話している。

上記の3漁港以外にも、2012年3月には島越漁港が製氷・貯氷施設回復支援事業(第3次助成)で製氷・貯氷ユニットの修繕を完了している。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



3漁港に漁船巻揚げ機を導入



活気を取り戻しつつある平井賀漁港

岩手県 製氷・貯氷施設回復支援事業

以前の3倍以上に強化した製氷能力で、水揚げ量の回復を目指す

県内で最も水揚量の多い大船渡魚市場は、2011年6月に市場の営業再開を果たしたが、安定的な水揚げを確保するための氷の供給能力は損失したままだった。大船渡魚市場は、大船渡市や岩手県沿岸南部の漁業者、さらに沖合の三陸漁場で操業する廻来漁船の重要な水揚基地であることから岩手県は本助成を活用。新しい製氷・貯氷保管施設の建設を支援し、2012年2月10日に地鎮祭を行うことができた。

8月に新施設が完成すれば、その製氷能力は以前の3倍以上の100tに、貯氷量も2260tから3000tまでアップする。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

「大船渡市の基幹産業である水産業の早期復旧には、震災で壊滅的な被害を受けてしまった大船渡魚市場の再生なくしてはじまらない」と、岩手県や大船渡市が協力し、2011年6月にいち早く市場の営業再開を果たすことができた。次に必要なのは、魚市場への安定的な水揚げを確保するための漁船への氷の供給施設である。この施設建設は国の補助事業と認められたが、総工費11億円のうち2/9相当額である2億4800万円を岩手県・大船渡市が負担しなければならない。そこで岩手県は、本助成を活用し、施設の建設を進めることにした。

2012年10月27日に、新しい製氷・貯氷保管施設が完成。竣工式で大船渡市漁業協同組合の岩脇洋一理事長は「念願の大型製氷・貯氷施設が完成し、地元漁船はもちろん、積極的に外来漁船の水揚げも促進できる体制が整いました。これからは当施設をフル回転させて地元水産業の復旧・復興を進めていきたいと思います」と挨拶した。

新施設は、鉄骨造り2階建てで延床面積は約2700㎡である。製氷能力は100t/日と震災前の3倍以上に、貯氷能力も3000tと以前より約33%増量し、市場の水揚げ回復のためその性能を存分に発揮している。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



施設の完成を祝い散餅の儀が行われた



新しい製氷施設から直接、船の中に氷を供給



水揚げのタンクを積んだトラックへも直接氷を供給する

釜石市漁業協同組合連合会 魚市場経営基盤再生事業

釜石市漁業協同組合連合会 魚市場経営基盤再生事業

リアス式海岸という地の利を活かした養殖漁業や小型漁船などの水揚げで活気づく釜石漁港。しかし、震災で大切な水揚げ施設が破壊された。魚の町・釜石の復活へ向けて整備を続け、2011年8月に第2魚市場を再開することができた。大型船やトロール漁船などにも対応できる“水揚げしやすい衛生的な市場”を目指し本助成を活用。2012年4月23日に新浜町地区・第2魚市場にて水供給装置（移動式砕水車両）、衛生管理施設（殺菌冷海水供給装置）の第1次竣工式を行った。釜石漁港では、毎時48tの砕水処理能力を持つ移動式砕水車両による市場内への短時間での水の供給と、殺菌冷海水供給装置により常時1℃の殺菌海水で魚を傷めずに鮮度を保持できるようになった。9月に予定する第2次竣工ですべてが完成となり、新しい“釜石ブランド”の構築が動き出している。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

「一刻も早く市場を再開して魚のまち・釜石のかつての活況を取り戻したいとみんなが願っていました。それには衛生管理施設の整備が不可欠です」と原田祐吉参事は話す。そこで釜石市漁業協同組合連合会は、2012年4月に整備を終えた新浜町第2魚市場に続き、11月に新浜町魚市場にも殺菌冷海水装置30t・1基を導入するとともに、新浜町魚市場の一部竣工式を行った。

現在、新浜町第2魚市場の取り扱い高は、計画を上回る数字を上げ、新しい衛生管理施設がその効果を発揮している。「水の消費が激しい夏季は特に、新浜町第2魚市場に導入した移動式砕水車両が大活躍してくれました」と原田参事。市場内を走り回る移動式砕水車両なら、水の供給を素早く臨機応変に行えると大変好評で、他の漁港から見学者が訪れるほどだった。

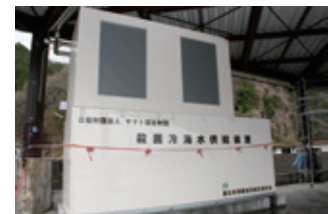
竣工式で釜石市の野田武則市長は「被災地の自立につながる水産業復活の原動力となり、産地間競争に対応できる水産物の付加価値を高め、水揚げ増強につなげたい」と挨拶を行った。

原田参事は「今回、新浜町第2魚市場に続き一部竣工した新浜町魚市場にも待望の衛生管理施設や輸送機器類が整備されたことで、2017年に完成を目指す新たな魚河岸地区魚市場建設による魚市場復興計画完遂に向けて、大きなステップアップになったと思います」と話している。

現在、多くの組合員が仮設住宅から市場に通っているが、水揚げ量が増加、安定すれば生活の目処も立ち、以前の生活に戻れるようになる。そのためには新しい魚市場には、万全の水揚げ体制がなんとしても必要である。今回一部竣工した新浜町魚市場は、大型漁船に対応できるように船が接岸する部分を長くし、また船から直接トラックのタンクに水揚げできるような仕組みになっている。

釜石市漁業協同組合連合会は、本助成の他にも県が申請した製氷・貯水施設回復支援事業（第3次）と水産共同利用施設復旧支援事業（第4次）により、製氷・貯水施設の修繕や荷捌き施設内の必要設備、機器の取得、確保も進め、より安心して多くの漁船が水揚げできる魚市場へと強化を図っている。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



20tの殺菌冷海水供給装置（新浜町第2魚市場）



移動式砕水車両



殺菌冷海水装置 30t（新浜町魚市場）



接岸場所を長くし大型漁船も接岸可能にした新浜町魚市場



竣工式で「魚のまち・釜石の復興の柱にしたい」と野田市長が挨拶



再稼働した製氷施設と移動式砕水車両（新浜町第2魚市場）

宮城県 農業生産復旧緊急対策事業

震災からいち早く立ち上がった農業生産者93事業体を支援

宮城県を襲った津波は、沿岸部に広がるいちごビニールハウスから内陸部の農地までをあっという間に飲み込んでしまった。一刻も早く営農再開を目指す農家を支援するため、宮城県は助成を申請。復旧対象は農地約1万3000ha、水稲約7万1020ha、園芸924haなどである。この助成を受け、いま多くの農家がそれぞれが抱える問題と正面から向き合い復興に挑んでいる。

オリジナルブランド“もういっこ”をはじめ仙台いちごの一大産地として有名な亘理町、山元町では380名の農家が、年間3800tのいちごを生産していた。海岸線沿いを走る街道・通称『ストロベリーライン』の周りには、見渡す限りいちごのパイプハウスが広がっていた。しかし、津波により大半がガレキの山に。流されたハウスは2万棟近く、約96haあった農園の約95%が被害に遭い、農地・地下水は塩水に侵されてしまう。いまは一刻も早い農地・設備の復旧手配が必要である。そこで「クリスマスまでにいちごの出荷を！」を合い言葉に、営農再開へ向けてみやぎ亘理農業協同組合をはじめ意欲あるいちご生産者が立ち上がった。

長瀬浜いちご生産組合の東條浩文さんは「うちのハウスは津波に流されずに済みましたから、私が頑張らないでどうすると自分を鼓舞しました。塩害で土も地下水もやられているため、地面に直接植えるのではなく、棚の上で育てる“高設栽培（養液土耕栽培）”にしています。例年に比べて定植時期が遅くはなったものの、2011年のクリスマスの出荷にはなんとか間に合いました」と話す。

津波に襲われた農地は、泥やガレキを撤去した後も土中にガラスや釘、針金などが残る。除塩作業も一度行ったくらいではなかなか効果は出ない。そこでみやぎ亘理農業協同組合は、助成で購入したトラクターなどで津波の被害のなかった内陸部の遊休未利用地を開墾、造成し『小山いちご生産団地』を作り、再開希望者を募った。ここに入った浅川一雄組合長は「お盆過ぎまでに苗を定植したいので、ぜひ助けてほしいとボランティアの方に協力をお願いしました。ボランティアのみなさんとクリスマスまでの出荷を約束していましたから、無事に間に合った時は本当に感無量でした」と振り返る。

一方、「一刻も早くいちごの生産を再開したい」との思いから会社を起こした農家もある。それが『山元いちご農園（株）』だ。完全コンピュータ管理の最新設備を備えた高設栽培で、1棟20a・全8棟のハウスの総工費は約4億6000万円。国の助成を差し引いても残り約2億8000万円の負担である。個人への融資は無理でも、会社なら融資してもらえると3軒の農家4人で株式会社を立ち上げた。融資条件は2012年3月までに収穫できることである。2011年12月までに6万4000本の苗を定植し、軌道に乗せ宮城県からも本助成で補助金が出ることになった。「いまの目標は5年後年商1億円です。私たちでもこうして再開できたのだから、他の仲間もあきらめずに頑張ってもらえたらと思います」と岩佐寿郎専務取締役は語っている。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】



ハウスの中、高設栽培で育てられる仙台いちご



長瀬浜いちご生産組合の東條さんは助成でハウス加温機を購入した



小山いちご生産団地 浅川さん



山元いちご農園（株）いちごへの情熱を語る岩佐さん

宮城県 農業生産復旧緊急対策事業

いちご、トマト、米、花卉など、多岐にわたり農業復旧を進める

いちごだけでなく野菜、米、花の生産者も動きはじめています。トマトを栽培していた阿部聡さんは家や農地、そして最も大切な家族も津波に奪われた。一時は生きる希望を失いかけた阿部さんだが「仕事まで津波に奪われてたまるか」と奮起。いしのみき農業協同組合の園芸農業の早期復旧・復興を推進するモデル事業“園芸用貸付ハウスの募集”に友人の佐藤雄則専務と応募する。採用条件は、農業法人化を目指す農家で、土地を自分たちで用意できること。そこで2011年12月に計4人の仲間と**株式会社イグナルファーム**を設立し、代表取締役となった。イグナルとは方言で“良くなる”の意味である。2012年5月25日には、3棟のハウスの引渡しが実現。本助成で購入した農業機械も活用して、ミディアムトマトの栽培をはじめた。「大玉トマトに比べ中玉トマトなら選別作業の労力を軽減できます。その分、肥料を自分たちで調合するなど特別栽培で手間暇かけ、美味しさにこだわっています」。トマトの収穫は7月中旬で約100tの収穫量の見込みだ。収穫後は、キュウリを育てていこうと夢を広げている。

8戸の農家で構成された**農事組合法人仙台イーストカントリー**は、90軒の農家の圃場を引き受け経営面積は64haと市内最大規模であった。しかし水田の約2／3が津波の被害を受け、農業機械の大半も流されてしまう。「大切な田んぼをこのまま放置などできない。私たち法人には、農地復活の旗振り役として頑張る義務がある」と佐々木均代表理事は話す。しかし、津波で損失した農業機械の購入費は、まだ完済できていないため、再購入すると二重債務となる。そんな仙台イーストカントリーに宮城県が助成の手を差しのべた。「2012年の作付けは水稲35ha、大豆2.4ha、飼育米0.4ha、稲わら収集を行います。これから規模も拡大していくでしょうし、ぜひ若い人にこの法人に入ってもらいたい。今後は6次産業化も目指します」。

助成先の中には、カーネーション農家もいる。津波に流され、泥に埋もれたカーネーションの株から自然に花が咲きはじめ“津波に負けないカーネーション”として名取市のカーネーションは話題となった。しかし、本格的な栽培再開にはこの泥の除去が必要である。「温室の中はゴミやヘドロでぐちゃぐちゃでした。それをボランティアのみなさんのご協力で全部片付けることができ、2012年の4月下旬から、苗を植えはじめることができました」と**名取市花卉生産組合**の菅井俊悦組合長は話す。同組合の三浦洋悦さんはいち早く栽培を再開できたカーネーション農家の一人だ。「ハウス内のヘドロに北海道酪農学園大学の長谷川豊教授が研究するパチルス菌の入った堆肥を入れ、半信半疑でそこにカーネーションの苗を植えたのです。これでなんと花が咲いたんですよ。こういう多くの人の励ましや、助成で生き返りました」と三浦さん。2011年11月からはじまったハウス3棟分の出荷量は約10万本。今後5棟全部が再開できれば約17万本になる予定である。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】



イグナルファームの約3300㎡のハウス3棟（写真上）、右から阿部代表取締役、星名常務、佐藤専務（写真下）



仙台イーストカントリーのメンバー（写真上）、トラクターやコンバインなど津波で失った農業機械を購入（写真下）



2011年5月、菅井さんのハウスで泥の中から咲き始めたカーネーション（写真：菅井さん提供）



助成や多くの人の励ましで生き返ったと話す三浦さん

宮城県 農業生産復旧緊急対策事業

津波により奪われたハウスやトラクターなど農業施設や機械を支援

石巻地区園芸生産組織連絡協議会の阿部市太郎さんは、海岸沿いにある釜地区に八つのパイプハウスを持ち、夏にトマトを春にはダイコンを栽培していた。地震発生時は春ダイコンの最盛期で、自宅にいた阿部さんはハウスが心配になり急ぎ駆けつける。その時、津波が襲ってきた。

「聞いたこともない異様な音が生きて、周りを見ると真っ暗になっていました。いま考えたら津波が襲ってきていたんですね。その時は、なにが起きたのかわからず慌てて作業場の2階に逃げ込みました」。幸い阿部さんは無事だったが、ハウスは使い物にならなくなり、土地も塩害に侵された。自宅ももう住める状態ではなく、なにもかも失ってしまった。

営農再開の助成を受けるには、とにかく土地を確保しなければならない。親戚から空いた土地があるのでそこを使ってはと声がかかり、なんとかハウス建設費などの支援を受けることができた。「助成が決まった時は、これでもう一度野菜が作れると心底ほっとしました」と阿部さん。

しかし、以前は3200本以上植えていたトマトの苗も、いまは2200本程度に減少してしまった。また、これまでの海岸沿いの砂地から、新しい粘土質の農地が変わったため、思い通りの収穫量を得ることもできていない。それでも阿部さんの表情は明るく、生き生きとしている。

「土地が変わると、病気の種類も変わるんですね。農業は本当に難しい。でも再開できている喜びの方が、こんな苦労よりも何倍も大きい。もっと土の勉強をして頑張りたいと思います」。阿部さんは、新天地での営農再開に意欲満々で臨んでいる。

いしのまき農業協同組合の管内で農業を営む渥美弥平さんの自宅には、津波から避難してきた11名の方が逃げ込んできた。浸水は1階の畳まで迫り、余震が続く中、2階で浸水が引くのをみんなで待っていた。やっと動けるようになったのは三日目のことである。

「とにかく支援所を作ろうと自宅を開放し、みんなで食べ物を持ち寄り炊き出しをはじめました。この地区70軒ぐらいの方に、おにぎりを作ってみんなで届けました」。3月20日に町役場から支援物資が届くまで炊き出しを続けられた。

渥美さんは、自宅の周りに6町の田んぼを持っていたが、この辺りは水はけが悪く暗きょ排水機械が必要である。組合を作り施設を共有してきたが、震災でその施設が破壊され、ここでの営農再開は困難となった。それでもいしのまき農業協同組合が、本助成を使ってトラクターや乾燥機などのリース代の支援を行うと聞き、別の場所にある4町の田んぼから営農再開に立ち上がった。

「娘が農業を継いでくれると言ってくれていますので、こんなことであきらめる訳にはいきません。市と協力しながら、新しい農地の確保へ向けて仲間と一緒に取り組んでいます。営農できる田んぼが増えることを信じています」。

刈り入れまで後少しと元気に育った稲を前に、渥美さんは力強く今後の夢を語ってくれた。

【以上、2012年10月31日版掲載情報】



阿部市太郎さんは助成でビニールハウスを建て(写真上)農業機械なども購入(写真下)



収穫したトマトを手にする阿部さん



営農できなくなった渥美弥平さんの田んぼ



もうすぐで刈り入れですと笑顔がこぼれる渥美さん



渥美さんは損壊した農業機械のリース代の助成を受けた

宮城県 農業生産復旧緊急対策事業

自分たちの土地で農業を、地産製品の製造を再開したい

岡田生産組合が製造する味噌“岡田産づくり”は、岡田地区で採れる大豆やお米を原料に、熱処理を行わない生味噌として多くのファンに支持されている。「地場産作物の付加価値を高めるためになにか取り組めないか」と1999年から味噌づくりに着手。約70人の組合員は、男性が大豆や米の作物を作る作業班に、女性がそれらを加工して味噌を造る加工班に分かれ、夫婦二人三脚で6次産業化を目指してきた。

「最初は1tの製造量でしたが、年数ごとに量を増やして震災前には10tまで生産できていたんです」と営農組合長の鈴木久可さん。人気も定着し、売り上げも順調に伸びていた矢先、この震災に襲われる。津波で味噌加工施設は、土台だけを残して流出。味噌が1t入る貯蔵コンテナは、1km以上先まで流されていた。

「みんな自宅も田んぼも津波で失い、がっくり肩を落としていたんです。その姿を見て遠藤組合長は“きっと復活するように頑張っから”と、助成の手続きから設備の手配、バラバラの避難先になった組合員のケアまでいろいろ奔走してきました。この遠藤組合長の頑張る姿や“もう一度美味しい味噌を食べさせて”と激励いただいた多くの方の声に組合員は勇気づけられました。そして、この助成で加工施設の設備や耕作機械などを導入できたことで、我々は立ち直れたのです」と鈴木さんは話す。

2012年3月に施設を再開し、11月に販売を開始。用意できたのは震災前の約半分の5tほどで直売所での販売だったが、あっという間に完売した。今年も震災前と同じ量を仕込み、より多くの方の自分たちの味噌を届けられるようにしようと、組合員は目標を立てている。

やもと園芸生産組織連絡協議会の菅原満雄さんは、トマトのパイプハウス再建のための助成を受けた。

「まさか津波が自宅までくるとは思いませんでした」と菅原さん。バリバリという轟音とともに津波は1000坪あったトマトハウスの8割を押し流した。周りの農家の被害も甚大で、中には破壊された家や農地を手放し、集団移転する人もいる。震災後、菅原さんはガレキや泥を撤去しながら、家族と残ったハウスを修繕し、営農再開への小さなスタートを踏み出す。

「塩害で駄目だと思われていた土地で美味しいトマトが作れた時、ああこの土地でもう一度やり直したいと心から思いました」。そんな時、本助成の話を聞く。必要な機材を揃え、2012年7月に500坪のミニトマトのハウスを再建した。先に自ら修繕して着手した分と合わせると700坪。まだ震災前の規模には満たないが、大きな前進となった。

「ハウスが完成して、すぐに苗を定植したので、9月には本格的な収穫をはじめられました。猛暑で収穫量は少し落ちましたが、売り上げ的には例年近くまでいき、ほっとしています。いま離農した方の田圃を組合が共同で耕作する話があり、農地整備を進めています。これが実現してからは、この地域の本格的な復興になるでしょうね」と菅原さんは、自分の土地で愛する農業を再開できた喜びを話してくれた。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



日が経つほど熟成され旨味が増す地場産の生味噌「岡田産づくり」



津波で流された加工設備を助成で新たに購入（岡田生産組合）



大豆などを作る作業班が活用するトラクター（岡田生産組合）



塩害に負けず成長するトマト（やもと園芸生産組織連絡協議会）



奥さんと一緒に再開した喜びを語る菅原さん（やもと園芸生産組織連絡協議会）



助成を受けたパイプハウスは500坪、残ったハウスと合わせ700坪でトマトを定植（やもと園芸生産組織連絡協議会）

宮城県 農業生産復旧緊急対策事業

次の世代に農業をつなげることが、本当の復旧になる

同じくやもと園芸生産組織連絡協議会の川元信正さんは、三つ葉の水耕栽培を行っていたが、900坪あったパイプハウスは震災で甚大な被害を受ける。

震災時、川元さんはパートさんと三つ葉の出荷作業中だった。激しい揺れとともに、突然停電。こんな状態では市場も機能していないだろうからと、パートさんを自宅に帰すことにしたが、海に近い方はもしも津波がきたら危ないからと一

緒に高台に避難するように指示した。この判断がなければ海近辺の方は命の危険にさらされる所だった。その後、襲ってきた津波でハウスも作業小屋も水没してしまう。津波は栽培層の上の棚まで入り込み、苗を植えていたプラントは壊滅状態となった。

「まだ返済が終わっていない機械やトラクターなども全部破壊されてしまいました。なかなか水が引かず、ハウスのガレキや泥を撤去できる状態になるまで1ヵ月も待ちましたよ」と川元さん。幸いだったのは、水耕栽培なので土地の塩害の心配がないことだった。それでも海水を被った機械は、早く修理しなければサビが出てしまう。川元さんは、以前地震で壊れた機械を修繕した経験があり、直せるものは極力自力で修理した。しかしハウスの建て直し費用、新規購入の機械費用などを計算すると再開費用は大きく膨らんでいく。

「個人経営ですので国の補助も受けられず、どうしたものかと悩んでいましたので、この助成は本当にありがたかったですね」。

被災状況から900坪あったハウスは、730坪に縮小することになった。それでも定植した苗を間引いて数を減らすのではなく、機械で移植してすべての苗を栽培する方法をとっていたので、震災前と同等の出荷量をキープできている。「うちは震災から5ヵ月後に再開できました。土耕栽培ならこうはいかなかったでしょうね。作業の大半を機械化し、コンピュータで管理するこの水耕栽培なら約45日で三つ葉を出荷できます。いまは1日約2400束を出荷でき、売り上げも徐々に回復しています」。震災後、一旦解雇したパートさんも無事に復職させることができた。

だが、震災でダメージを受け、復旧に苦しむ地域農業の再生のためには、いまの自分たちの世代だけではなく、次の世代のことまでしっかりと配慮していかなければならないと川元さんは考える。

「この震災の被害で、どこもみんな震災前より後継者問題が一層深刻になっています。私は三つ葉の水耕栽培を1980年からはじめてノウハウもかなり蓄積できています。できればこの技術や設備などをうまく継承できる方法を組合とも検討し合っ、若い世代につなげていくことこそが本当の意味で地域農業の再生には大事だと思うのです」と川元さんは話している。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



川元さんのコンピュータで管理する三つ葉の水耕栽培



スポンジに種をまき芽が出たところを機械で切り取る



根分けしたスポンジを発砲スチロールのベンチに移す



大きくなった三つ葉をさらに植え替えていく（上から押して下から根をエアで吸い込む）



約45日で出荷できる状態に



この機械で1日約2400束を包装



出荷先は石巻、仙台、秋田、弘前の市場

相馬市 相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業

海上コンテナ輸送の早期再開へ、応急荷役設備を助成

相双地方の重要な物流拠点である相馬港は、コンテナを取り扱うための各種荷役設備を整え、2009年に念願の海上コンテナ貨物の国内航路の就航をスタートさせた。そんな矢先、相馬港を地震と津波が襲い、岸壁や沖防波堤が激しく損壊。整えたばかりの荷役機械の大半が海中に倒壊し使用不可能になるなど、港の機能は大きく低下した。その後応急復興が進み、なんとか四つのバースは使用できるようになったが、再開できたのはバラ貨物の荷役のみ。コンテナ航路は休止となってしまった。

国や県の港湾施設復旧計画では概ね3年から5年は費やすこととなる。このままでは、いままでコンテナ航路を利用していた企業は、不便な内陸経由での輸送を強いられただけである。「操業再開した各企業から一刻も早い復旧が強く求められています。機械はリースでも良い、早く港の機能を回復しなければ大切なお客様まで失ってしまう」と相馬市産業部商工振興課 住吉康男主幹。危機感を抱いた相馬市は本助成に申請を行った。

相馬市では、本助成をもとに応急荷役設備として代替えクレーンやコンテナ集積機材であるリーチスタッカーの整備を行い、2011年12月には相馬港内航フィーダーコンテナ航路の再開まで漕ぎ着ける。さらに2012年1月28日には「相馬港機能復旧記念式」を開催することができた。

記念式には、立谷 秀清市長や復興に携わった多くの関係者が出席。相双地方そして南東北の物流拠点港湾としての相馬港の機能が整うことで、相双地方の産業再生が前進するように祈願した。また、記念式に出席した東日本大震災復興支援選考委員会の家田 仁選考委員は「国や県の長期復興プロジェクトに頼るだけでなく、いま地元でできることを考え、素早く取り組む。時間を大切にすることの姿勢こそ復興につながります。だからこそ相馬港を助成先に選びました」と復興へのエールを送った。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】



被災したバースを示す住吉主幹



2011年12月コンテナ航路再開の一步を



修繕したリーチスタッカー



相馬港機能復旧記念式

社会福祉法人野田村保育会 野田村保育所再建事業

安心して保育できるように1km内陸で17m以上高台へ建設、野田村復興のシンボルに

“園児全員が奇跡の脱出”と新聞にも取り上げられた野田村保育所。震災当時、野田村保育所では、0～6歳の子どもを91人も預かっていた。それでも全員が無事に脱出できたのは、月に一度きちんと防災訓練を行い、より安全な避難ルート、避難場所を繰り返し検討・改善してきた成果である。さらに乳児十人が乗れる大型の乳母車を避難車として購入し、他にもおんぶ紐でだっこをする、手を引くなど、どの子どもをどの保育士がどう避難させるかを綿密に計画・準備していた。お陰で園児、職員ともに全員が無事だったが、施設は津波に破壊され、いまは村のガレキ置き場となっている。

野田村では、急遽閉鎖していた旧新山保育所を開放したが、この施設の定員は45人。震災後残った64人の子どもたちの保育を行うには狭過ぎる。早く村に帰ってきたいと願う人たちのために、復興に励む保護者が子どもを安心してあずけられるように、保育所の再建は早急な課題であるが、移転となると原形復旧が原則の国の補助はつかない。そこで野田村ではヤマト福祉財団に助成申請を行った。

助成決定の報告が届いた時「これでやっと子どもたちを安心して保育ができる。新しい施設を建設することができる。やっと不安な毎日から解放され、保育に専念できる。そう思うと本当にうれしくて…」と玉川久美子所長は振り返る。

2012年4月11日には、新しい野田村保育所建設の地鎮祭が行われた。岩岡吉比古理事長は「村の未来を担う子どもたちを笑顔で伸び伸びと育てられる施設が、1日も早く完成することを願うばかりです」と話す。11月に完成予定の新しい保育所は、建築面積981.66㎡、延床面積856.25㎡、園児90人が入ることができる。この建設用地は“いままでよりも高台で津波の心配のない所。より広い敷地で伸び伸びと子どもたちを育てられる場所”という野田村保育所の希望に沿って野田村が用意したものだ。

「地域で支える、親子にやさしい環境づくり」を目指し、村一丸となって新しい野田村保育所の再建が着々と進められている。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

2012年9月9日の秋晴れの空の下、300人強の参加者が集まり、盛大に新しい野田村保育所の上棟式が行われた。

散餅の儀では「お餅を10個もひろったよ！」と保育園児たちは、はじめての経験となる上棟式に大喜びであった。そんな園児たちの笑い声を聞きつけ、どこからとなく多くの村民が集まり、上棟式はより華やかなものとなった。

「村の未来を担う子どもたちを安心して預けられる新しい保育所を一刻も早く…」。そんな願いを込めて新しい野田村保育所の完成を心待ちにしていた野田村のみなさんにとって、この上棟式は村が復興に向けて歩き出す大切な一歩でもある。

【以上、2012年10月31日版掲載情報】



以前より1km内陸に入った17.2m高台に建設中



村のガレキ置き場となった跡地



4月11日に行われた地鎮祭



子どもたちの安全と健康を願って上棟式が行われた



野田村復興のシンボル誕生に多くの村民が集まった

社会福祉法人野田村保育会 野田村保育所再建事業

子どもたちの歌とお遊戯が、“竣功式”、開所式に華を添える

2012年10月30日、念願の新しい野田村保育所が完成し、“竣功式”が行われた。かつての保育所は、湾岸から西にわずか500mの場所にあり、津波で建物は跡形もなく流されてしまい、現在はその門柱だけが残っている。新しい保育所の場所は、津波の心配を払拭するため以前より1km内陸、17m以上の高台となった。坂道の上にあるメルヘンチックな建物の新保育所は、園児90人が伸び伸びと遊べる規模へとスケールアップ。また、快適で明るい空間で保育できるように、すべての保育室に太陽光を取り入れる配慮もされている。

竣功式の前には、被災の様相や助成の内容が記された記念碑の除幕式が行われた。竣功式で野田村保育会の岩岡吉比古理事長は「子どもたちに安心、安全な素晴らしい環境を与えていただき感謝しています」と挨拶。また小田祐士村長は「村では共働きで生計を立てている家庭も多く、保育需要が高まっていますので、保育所の早期再建は子育て世代のたつての要望でした。いま村は復興に向かって一丸となって前進しています。再建された新しい野田村保育所は重要な子育て支援の拠点であり、目に見える復興のシンボルとして全村民が喜んでいきます」と話した。

竣功式の翌々日の11月1日には、園児や保護者、職員、関係者170名が集まり開所式が開かれた。まずは園舎の玄関前で、野田村保育会の岩岡理事長をはじめとする関係者によるテープカット、年長児童代表4名によるくす玉割りが行われた。

続いて遊戯室に移り、年長児童代表が「とても楽しみに今日を待っていました。みんなで大好きな鬼ごっこをしたいです。きれいな保育所を作ってくれてありがとうございます」とかわいいメッセージを発表。そのあとは園児による歌やお遊戯が披露され、多くの保護者、関係者から温かい声援が送られた。いままで臨時で使用していた保育所は狭く、お遊戯の練習場所もままならない状態であった。「一刻も早く伸びのびと安心できる場所に」と待ち望んでいた保護者や職員のみなさんは、元気に踊る子どもたちの姿をまぶしそうに見つめていた。玉川久美子所長も「今日は、子どもたちの喜ぶ顔が見たくて、いつもより早く出勤してしまいました」と笑う。

子どもたちがなにより喜んでいるのは、広くなった園庭、そして新しく変わった遊具施設である。中でも一番の人気は、砂場だ。「うちの砂場はお屋根がついているんだよ!」と誇らしげに話している。他にもカラフルなイス、かわいい絵の付いた時計など、すべてが子どもたちのお気に入りだ。楽しそうに遊ぶ子どもたちを見つめながら玉川所長は「みなさまのお力で、素晴らしい環境を整えていただけました。この後は村を担っていく子どもたちをしっかりと保育できるように、私たち職員が頑張る番です」と開所の喜びとともにこれからの決意を話されている。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



■新保育所の概要

●木造平屋建て●建物：856.25㎡●敷地：5361.39㎡
●園児：90人定員●職員：16人



園児たちのくす玉割りで開所式がスタート



入口に建立された竣功碑



元気にお遊戯を披露する園児



園児に人気の「お屋根の付いた砂場」



エントランスや廊下も太陽光を取り入れ明るく

社会福祉法人野田村保育会 野田村保育所再建事業

広い園庭を埋め尽くす観客の声援を受け、初の運動会を開催

9月21日、万国旗が風にたなびく青空の下、新しい野田村保育所となって初めての3歳児以上の運動会が開催された。運動会には、園児の保護者や祖父母、来賓、小学生、地域の方、さらに入所前の子どもたちと保護者を合わせた約290人が応援に駆けつけた。広い園庭を埋め尽くす観客から拍手を受け、3歳児16名、4歳児20名、5歳児23名の計59名が元気に入場行進を行い、運動会がスタート。

「園児たちは“とどけげんき、つながれえがお”をテーマに、力いっぱい走り、踊り、勝つ喜びや負ける悔しさを胸に、最後までやり遂げることができました。この運動会を通して、子どもたちはまたひとつ心身ともに大きく成長できたと思います」。元気いっぱいな園児たちの姿に、先生方は新しい環境での保育に確かな手応えを感じとられている様子だった。

「とどけげんき、つながれえがお」をテーマに張り切る子どもたち



小さな怪獣に変身しダンスを披露する園児たち



子どもたちの笑顔に、観客はたくさんの元気をもらいました

【以上、2013年10月31日版掲載情報】